

## かがわの竹林で学ぶSDGs講座 開催しました！



- 日時 令和5年2月25日（土）10：00～12：00
- 会場 ドングリランド（高松市西植田町）
- 講師 河合 洋人氏（NPO法人 どんぐりネットワーク）

2月25日（土）、ドングリランドにて、「かがわの竹林で学ぶSDGs講座」を開催し17名が受講しました。本講座では、竹の不思議な生態や、森や海への影響、さらに近未来の竹の利用法について座学とフィールドワークを通じ、里海づくり活動に必要な知識を身につけることを目的として開催しました。

はじめに、講師より竹とSDGsについての座学がありました。SDGsは持続可能な開発目標と訳されますが、人類が地球で生き続けるために必要なことであるという説明がありました。そして、海や陸の豊かさを守ることに同様に、温暖化についても考えなくてはいけない問題であり、大気中の炭素（二酸化炭素）が増えることが温暖化の原因であるという説明がありました。炭素は大気-陸-海をぐるぐる回っており、陸（主に植物の中）は大気中の約3倍、海は大気中の約50倍の炭素があるそうで、我々に出来る事として炭素の排出量を減らし、植物（森林）を増やすことが大切であるというお話に受講者たちは熱心に聞き入っていました。

次に、竹の生態や利用法についてのお話がありました。世界の竹の分布を見るとアジア、南米、アフリカが多く、日本の竹は主にモウソウチク、マダケ、ハチクの3種類で占められているそうです。竹にも花が咲き、その花が稲に似ていることから竹は“木”ではなく“草”であると考えられてきたそうで、今では遺伝子研究の結果からもその説が正しいようです。そして、竹の花は長い期間を空けて咲くそうで、モウソウチクで約60年、マダケ・ハチクになると約120年になるそうですが、開花のメカニズムなど竹の生態についてはまだ詳しく分かっていないそうです。



※竹の花（2022/11/15公洲公園で採取したもの）



竹の利用法について、日本では古くから日用雑貨の他にも農業や漁業で使用され、今でも牡蠣いかに竹が使われています。また、第二次世界の時に鉄が不足したため、鉄筋の代わりに竹を骨組みに用いた竹筋コンクリートとして使用されていたそうです。現在では、竹の繊維が注目され、竹の繊維を活用した繊維強化プラスチックとしてスピーカーのコーンや振動板などにも使用されているそうです。さらに、植物から造られたCNF（セルロースナノファイバー）は鋼鉄の1/5の重さで5倍の強度を持っており、自動車や建材、さらには宇宙開発の部品にも使用されているそうで、環境に配慮した新しい素材として研究開発が行われているという説明がありました。座学の最後には、受講者から「竹の新しい使い道」、「竹の定義」、「CNFはSDGsの観点からみてどうなのか」等、多くの質問が寄せられ、受講者の関心の高さが伺えました。



※ハチク



※竹の子の皮（ハチク）



※地下茎

竹林に移動し、最初に竹の見分け方についてお話がありました。モウソウチクは節の輪が1本でマダケとハチクは2本あり、マダケとハチクの違いは竹の子の皮を見比べると斑点があり、産毛がある方がマダケだそうです。この竹林はハチクですが、スーパーなどで売られているものはモウソウチクが多いそうです。竹の成長についてお話では、実際に切った竹や地面から出た地下茎を見ながら竹の成長スピードがなぜ早いのか分かりやすく解説して頂きました。また、竹は竹の子の時に大きさが決まっていて、竹の子の時よりも太くならないという解説に受講者たちはとても驚いた様子でした。竹林の管理についてのお話では、受講者の方も頭を悩ませている方も多くいらっしゃったようで、「いつ竹を切ればいいのか」、「竹の活用法」、「竹炭について」等の質問に一つ一つ丁寧に解説いただきました。



講座終了後、受講者からは「竹を見ながらの解説があり、分かりやすかった」、「竹林の管理に役立つような話がたくさんあった」、「様々な角度からの知識が得られた」等の感想がありました。